サロンさんの実家がある村は、シェムリアップ市街から車で 1 時間ちょっとののどかな農村で、おもに農業で生計を立てている人々が暮らしています。

交通量の多い国道から外れ、細い土の道に入ってサロンさんの家へ向かうと、そこはまさに村の世界。井戸を中心とした農村部で見られる木造高床式の住宅が点在しています。サロンさんの家もやはり木造高床の家です。到着すると、まずは床下に案内されました。高床式住居の床下の活用方法はじつにさまざま。一家がくつろいだり、食事をとったり、民具作りや機織りなどの仕事場にしたり、さらに牛などの家畜を飼育する場として使う家庭もあります。

サロンさんの家では食事や一家団欒の場として使われているようで、まずそこに通され、ほんのりと心地よく冷えたココナツジュースをいただきました。暑いカンボジアではとっても嬉しいおもてなしです。とれたてのココナツジュースはまさに新鮮そのもので、乾いた喉をするすると通り、乾いた体を潤してくれます。それもそのはず。ココナツジュースは水分吸収率がいいと言われており、カンボジアでは古くから体調が悪いときや疲れているときなどに飲まれてきた国民的飲料なのです。
涼しい床下で広々とした村の風景を眺めながら味わうココナツジュースは、市内のレストランで飲むものとは違ってまた格別の味でした。

■いよいよ牛車体験へ！

市場をあとにして、いよいよ楽しみにしていた牛車体験へ！サロンさんのお宅から少し離れた農道で、大きな車輪のついた木造の牛車が待っていてくれます。簡素な構造ですが、近くで見るとその大きさや威風堂々とした佇まいに迫力を感じました。二頭立ての牛車で進行方向には茶色と白っぽい肌の牛がつながれています。立派な角と大きな体がとてもたくましく見えますが、性格はいたって穏やかなようで、クリクリとした黒い小さな目が哀愁を誘います。牛君、よろしくね！
後ろから乗りこみ、板を通した座席につくと、いよいよ出発です。御者のおじさんが牛を駆り、牛君たちがゆっくりと動き出しました。ゆったりとしたスピードが、村のゆるやかな空気の流れととてもよく合い、そこにさわやかな風が緑に囲まれた村の香りを届けてくれます。

しずかな村の景色を楽しみながら牛車に揺られていると、別の牛車に乗ったにこやかな顔の村人とすれ違いました。ちょっと小型の可愛らしい牛車で、おじさんがひとりで乗っています。畑から帰ってきたのでしょうか。マイカーならぬ、マイ牛車、ちょっといい響きですね。

さらに先へ進むと、村の人と村の大人や子どもが元気いっぱいの笑顔で手を振りながら声をかけてくれました。初めて訪ねた村ですが、村の人の温かな歓迎を受けているようで、なんだかとても嬉しくなったと同時に、この人との距離感がしばらく帰っていない実家に戻ってきたかのような懐かしい気持ちにさせてくれました。村には世界遺産のような名所はありませんが、外から来た人を温かく見守ってくれるような人々の気持ちは、文字通りここにしかない魅力だな、そんなことを考えました。
ところで、カンボジアの農村で現在も現役で活躍している牛車ですが、いつごろからカンボジアの人たちが暮らしのなかで使ってきたのかご存知でしょうか？？　実は、そのヒントがアンコール遺跡にあるんです。アンコール時代に都が置かれていたところとして知られる都城遺跡アンコール・トム。その中心寺院バイヨン（12 世紀末建造）の回廊には、アンコール時代の人々の暮らしが鮮やかに描かれていますが、そこにも牛車の姿が！　つまり、カンボジアの村では 900 年以上前から現在に至るまで牛車が人々の生活とともにあるということがわかります。

900 年前と言えば、平安後期から鎌倉時代です。今、まさに数百年も前から活躍していた乗り物に私は乗っている！　そう考えると、あたかも古代にタイムスリップしたかのような錯覚にとらわれ、思わず大興奮してしまいました！！

牛君、村のみなさん、どうもありがとう！

（カンボジア担当）